

一般口演①

演 題	(一社)浦和歯科医師会と埼玉県立がんセンター共催による口腔がん集団検診について
所 属	一般社団法人浦和歯科医師会
発表者名	君島 裕
共同研究者名	清水裕之 ¹⁾ 、塩野英昭 ¹⁾ 、矢尾喜三郎 ¹⁾ 、八木原一博 ²⁾ 、石井純一 ²⁾ 、炭野 淳 ²⁾ 、桂野美貴 ²⁾ 1) 一般社団法人浦和歯科医師会 2) 地方独立行政法人埼玉県立病院機構埼玉県立がんセンター 歯科口腔外科

浦和歯科医師会では埼玉県立がんセンター口腔外科の協力のもと、2023年11月より口腔がんの集団検診を開始した。対象者は50歳以上のさいたま市在住の市民で、往復ハガキによる応募に対して抽選にて決定している。検診は歯科医師会会員(一般歯科医)と埼玉県立がんセンターの口腔外科専門医によるダブルチェックで行うスタイルで、神奈川県藤沢市歯科医師会の集団検診を参考に行なっている。

欧米諸国では早期発見・早期治療を徹底することで、罹患率は変わらないものの死亡率は減少傾向にあるが、日本では口腔がんは発生頻度が全がんの約1%とそれほど高くないが、罹患率、死亡率とも年々増加傾向にある。口腔がんは患部を直接見ることが可能な事から早期発見しやすいがんと言えるが、初期の口腔がんは自覚症状がほとんど無く、知識も無いため、進行がんになるまで放置されてしまうケースが多いと言われている。初期の段階で発見できれば、比較的簡単な治療で済むが、進行がんでは拡大手術により日常生活に支障を残すことが多く、社会復帰が困難になる。

すなわち口腔がんの予防、検診、早期発見、早期治療、治療成績の向上はわれわれ歯科医師に課せられた重要な責務である。そのため、われわれは口腔がん集団検診の目的として1) いわゆる口腔がんの啓蒙活動(市民に口腔疾患への関心を持たせ、早期受診を促す) 2) かかりつけ歯科医が口腔がん検診に参加することで、安心して口腔粘膜を診る機会を作り、何か通常とは違うと判断する「存在診断」をできるようになることと考えている。浦和歯科医師会と埼玉県立がんセンター共催による口腔がん集団検診は回数を重ねてきたので、その概要を報告する。

Keyword : 口腔がん検診

一般口演②

演題	和光市5歳児健診立ち上げへの歯科衛生士の関わり ～小集団講話を通じた多職種との協働の実践～
所属	埼玉県歯科衛生士会 朝霞支部
発表者名	青木 玲奈
共同研究者名	富永悦子、村上由美子（埼玉県歯科衛生士会 朝霞支部） 中村 孝、佐藤貴映（朝霞地区歯科医師会）

和光市では、就学前児の発達と生活習慣を多面的に評価する新たな5歳児健診を、2024年4月に多職種協働で立ち上げた。本健診には小児科医、内科医、小児神経科医、心理士、保健師、看護師、歯科衛生士、管理栄養士、保育士の9職種、計28名が参画し、短期間で包括的な評価体制を構築した。とくに歯科衛生士による小集団講話は健診の導入に位置付けられ、子どもが安心して健診を受けられる環境づくりの役割を担った。

準備期間は3～4ヶ月と限られたなかで、入室直後からスムーズに母子分離を促す声かけや、子どもを惹きつける導入表現、10分の講話構成、語彙選択、抑揚や間の取り方などを多職種で協議を重ねた。健診対象は1健診あたり50～70名であり、約20名弱の小集団講話を3～4ターン実施した。歯科衛生士はパペット人形を用いた劇形式で歯みがきの重要性やおやつのごちそうを伝え、子どもが自然に前向きに参加できるよう工夫した。「右手をあげる」などの口頭指示を講話に取り込み、心理士、保健師は言葉の理解度や同じ動きができるかといった同調行動、集中の持続を観察した。講話後には片足立ちやケンケンを行い、粗大運動の確認も行った。これにより健診の導入段階で自然な発達観察が可能となった。

初年度はスタッフの動きや担当者の配置などに課題もあったが、多職種で振り返りを重ねることで改善が進み、健診の質は次第に安定した。歯科衛生士による講話は、口腔衛生指導に留まらず、発達評価の入口としても機能し、多職種が行う評価の流れを円滑につなぐ役割を果たした。

今回の5歳児健診の立ち上げにあたっては、歯科医師会より口腔写真の提供をいただき知識共有の面で支援を得た。今後、歯科医師による歯科健診が加わることで口腔領域の評価がさらに深まり、全身発達の把握もより確かなものになると考えられる。これらは健診全体の向上にも寄与すると見込んでいる。

Keyword：歯科衛生士・5歳児健診・多職種協働・小集団講話

一般口演③

演 題	肉芽組織によるシーリングテクニックを用いて歯周組織再生療法を行った2症例
所 属	明海大学歯学部口腔生物再生医工学講座歯周病学分野
発表者名	尾上 宏太郎
共同研究者名	大竹 和樹、申 基喆、林 丈一朗

歯周組織再生療法の術直後において歯間部に生じる歯根面と歯肉弁の間隙に対して、垂直性骨欠損内の肉芽組織を翻転させることで封鎖性を向上させたところ、良好な治癒が得られたので報告する。

<症例1>

【症例の概要】 57歳男性 初診:2019年2月 主訴:歯に着色がある

【診査・検査所見】 PPD 4 mm 以上の部位 : 31.5% BOP : 24.7% PCR : 38%
エックス線所見 : 全顎的に軽度の水平性骨吸収, 36 遠心に垂直性骨欠損を認めた。

【診断】 広汎型慢性歯周炎 ステージⅢ Grade B

【治療方針】 ①歯周基本治療 ②再評価 ③歯周外科治療 ④再評価 ⑤SPT

【治療経過】 36 遠心に Emdogain®Gel と Bio-Oss®を併用し、肉芽組織によるシーリングテクニックを用いた歯周組織再生療法を行った。アタッチメントゲインは 3 mm であった。

<症例2>

【症例の概要】 72歳男性 初診 : 2023年2月 主訴 : 左下の歯茎から血が出る

【診査・検査所見】 PPD 4 mm 以上の部位 : 34.6% BOP : 21.7% PCR : 33.8%
エックス線所見 : 全顎的に軽度の水平性骨吸収, 35 近遠心に垂直性骨欠損を認めた。

【診断】 広汎型慢性歯周炎 ステージⅢ Grade B

【治療方針】 ①歯周基本治療 ②再評価 ③歯周外科治療 ④再評価 ⑤SPT

【治療経過】 35 近遠心に Emdogain®Gel と Bio-Oss®を併用し、肉芽組織によるシーリングテクニックを用いた歯周組織再生療法を行った。アタッチメントゲインは 4mm で、辺縁歯肉のクリーピングも認められた。

【考察】 本術式を用いることにより、バイオフィルムおよび上皮の歯肉縁下への侵入が抑制されたため、良好な結果が得られたと考えられる。

Keyword : EMD 歯周組織再生療法 肉芽組織

一般口演④

演題	口腔咽頭梅毒の1例
所属	国立病院機構埼玉病院歯科口腔外科
発表者名	雨宮 剛志
共同研究者名	安川 仁章

梅毒は梅毒トレポネーマ (*Treponema pallidum*: Tp) による性感染症で、皮膚をはじめ様々な臓器に病変を生じるため、全科を受診する可能性がある。一方で口腔や咽頭に病変を生じると口腔咽頭梅毒と呼ばれ、性交様式の多様化に伴い口腔咽頭梅毒の患者は増加している。また、口腔咽頭梅毒の病変の表面には Tp が多く存在するため感染力が強く、拡大防止の観点から迅速な診断と治療が求められる。今回、われわれは口腔咽頭梅毒の症例を経験したので報告する。

症例は51歳の男性。当科受診の3か月前より右舌に疼痛を自覚し、近在歯科に受診するも口内炎と診断され経過観察となった。その後、疼痛が咽頭まで波及したため他の歯科医院を受診し、右舌癌と中咽頭癌を疑われて紹介され当科を受診した。左右顎下部に圧痛を伴う腫脹したリンパ節を触知し、右舌に20×15mmの白色の粘膜斑を、軟口蓋と口蓋扁桃に灰白色の粘膜斑を認めた。しかし、バラ疹や丘疹性梅毒疹は認めなかった。舌癌、中咽頭癌あるいは口腔咽頭梅毒を疑い、造影MRI、血液検査および舌の粘膜斑からの生検を施行した。造影MRIで右舌と中咽頭に造影効果を伴う高信号域を認めた。病理組織学的所見として上皮は肥厚し一部にびらんを認め、上皮下に線維性組織の増生と炎症細胞の浸潤を認めた。また、びらん部にGiemsa染色陽性の桿菌とらせん菌を認めた。血液検査でTPHA法は81,920倍、RPR法は128倍と高値を示したため、第16病日に口腔咽頭梅毒と梅毒性リンパ節炎と診断した。同日よりベンジルペニシリンベンザチン水和物(BPB)240万単位の筋注を開始したところ、第23病日には疼痛と口蓋後縁の粘膜斑は消失し、第43病日には右舌の粘膜斑も消失した。しかし、RPR法は128倍と高値を示したため2回目のBPB240万単位を筋注した。その後、受診が途絶えて連絡がつかず、現在、初診より1年10か月が経過しているが治癒は確認できていない。

Keyword : 口腔咽頭梅毒

一般口演⑤

演題	歯科外科手術におけるアルチカインの有用性と効率的な使用方法についての考察
所属	埼玉県歯科医師会 学術部
発表者名	宮澤 篤史
共同研究者名	高橋健児、古澤 満、中島伸之、増田浩之、田中敏史、高澤 淳仁、穴山宏美、小柳 聡、飯田浩司、高橋和代、新井英幸、鈴木義顕、井上栄一、浪越 順、弦間豊樹、清水太加志、成田沙織、君塚 崇、荒岡大輔、福原直子、中村篤史、渡辺和志、岩田昌久

2025年1月21日にGC昭和薬品より新しい歯科用局所麻酔であるセプトカイン®が販売されました。本薬品は、日本で初めて認可された有効成分アルチカインを使用した局所麻酔であり、世界では主用薬剤でありながら、四半世紀ほど遅れて日本で認可された薬剤です。基本性質としては他のアミド型局所麻酔薬と類似していますが、代謝が速く、安全域が広い特徴があります。

認可されてから間もないこの麻酔薬を歯科治療、特に使用量の多い外科手術に対してどのように使用すれば効果的に使えるのか、また、容量などを変えることでリドカイン製剤など他の麻酔薬と比較し、どのような利点があるのかを当院の外科手術をもとに検証してみたものである。

今回、アルチカイン製剤とリドカイン製剤を用いて行った外科手術（主に歯周外科手術）において、学術論文的な効果・効能ではなく、術者の使用感や患者の体感を主な視点とし、臨床的な観点から利点をいくつか体感出来たので、同製剤をこれから使用しようかお考えになっている先生方にこれらを報告するものとなりました。

〈参考文献〉

宮脇卓也、砂田勝久：アルチカインを知ろう！.デンタルダイヤモンド社. 2025
樋口仁 他：歯科用アルチカイン製剤の有効性と安全性. 日本歯科麻酔学会. 2025

Keyword：歯科麻酔 アルチカイン 歯周外科

一般口演⑥

演 題	舌苔除去における機械的刷掃法と OUFBW を併用した改善例 (症例報告)
所 属	比企郡市歯科医師会
発表者名	杉澤 満
共同研究者名	

舌苔 (Coated tongue) は、舌表面に付着した上皮から剥れた垢のことを示し、口腔内の細菌や食物残渣が繁殖することにより発生する⁽¹⁾。原因としては、口呼吸による口腔乾燥、咀嚼機能低下による舌運動の不足や唾液分泌量の低下、緊張性ストレスによる自律神経の乱れ、また全身疾患（糖尿病、シェーグレン症候群）等の副作用が挙げられる。

症状は、軽度の付着においては無症状であるが、舌苔が堆積すると口臭や味覚障害、さらには接触痛などの舌炎が生じることがある。舌苔除去には、舌ブラシの使用による機械的除去法や酵素による化学的除去法があるが、プラークコントロールのように一定の方法が確立されていないのが現状である⁽²⁾。

本症例は、舌苔が堆積され舌痛症が併発した症例において、舌ブラシ（ZETU CARE PREMIUM：株式会社松風）による機械的刷掃法に加え、オゾンウルトラファインバブル水（Ozone Ultrafine-Bubble Water (OUBW)：日本ビデイリース株式会社ナノスイカンパニー、静岡）を用いた刷掃と含嗽の併用による舌ケアを毎日継続的に行った。その結果、3週間経過後に舌苔が効果的に除去することができた症例を経験したので、その概要に若干の考察を含めて報告する。

<参考文献>

- (1) 山下和弘 他：舌清掃の目的とその方法。老年歯科医学 15(3)305-308, 2001.
- (2) 上田貴之, 須藤るり, 他：口腔ケア用ジェルを併用した舌清掃による要介護高齢者の舌苔除去法 老年歯科医学 27(4)366-372, 2013.

Keyword：舌苔，オゾンウルトラファインバブル水，機械的刷掃法

一般口演⑦

演 題	筋ジストロフィー症の e スポーツ競技者へマウスガードを提供した症例 第2報
所 属	葭田歯科医院
発表者名	葭田 敏之
共同研究者名	中村 修啓、柴田 督弘

現在 e スポーツは 2027 年に IOC によりオリンピック・e スポーツ・ゲームズが開催決定されるなど、急速にその活動の場を広げている。競技中の食いしぼりは e スポーツにおいてもみられるため、マウスガードは e スポーツにおいても必要であると考えられる。我々は去年よりデュシェンヌ型筋ジストロフィー症 (DMD) を発症している e スポーツ競技者にマウスガード (MG) を提供したので経過を報告する。

被験者は 8 歳の頃より DMD を発症した男性 (30 歳)。ADL 全介助、人工呼吸器装着 (FiO₂ 21%、加圧)、服薬は無い。被検者は咀嚼筋で下顎骨を動かしオトガイ隆起部でレバーを操作している。印象採得は可搬型光学印象装置プライムスキャンコネクト (デンツプライシロナ社) を用い、被験者宅・イベント会場で採得した。スキャンデータから 3D プリンターで模型を出力し、上下顎模型上に MG を作成した。マウスガードはポリエチレン (PE) またはエチレンビニル酢酸 (EVA) のシートを用いて加熱・加圧成型機を用いて作成した。使用時咬合接触が無いため咬合調整は行っていない。

被験者は最大開口量が 30 mm 程度であったため、最後方歯まで印象を採得することができなかった。また下顎前歯部は小帯強直のため安定してスキャンすることができず、印象を採得することができなかった。マウスガードはまず 1.0mm 及び 1.5mm の PE または EVA のシートを用いて作成し使用してもらい、感想に応じて新たなマウスガードを作成した。最終的に最も使いやすかったのは EVA 0.9 mm であった。翌年に下顎にも作成を希望したため、口唇を排除する口角鉤を用いて下顎の印象を採得し、EVA0.9mm を作成し、提供した。

マウスガードは被験者の状態・使用目的に合った作成方法・素材・形態で作成される重要性を改めて認識した。

Keyword : 筋ジストロフィー、マウスガード、光学印象、e スポーツ

一般口演⑧

演題	当医院で行っている障害者歯科について ～ダウン症への対応～
所属	医療法人社団慶學會こしば歯科医院
発表者名	小柴 慶一
共同研究者名	木賀 雄太

緒言：ダウン症候群は障害者の中でもよくある疾患で、我々も接する機会が多い。一方同障害は知的能力障害や心疾患、てんかんの合併が高頻度で見られるため適切な対応が重要である。また近年ではダウン症候群の平均寿命も伸びてきており、高齢化への対策も問題となってきた。今回我々は当医院で行っているダウン症候群患者への対応について集計検討したので報告する。

方法：1ヶ月間に来院した障害者の中でダウン症候群患者について集計した。また特徴的な症例について治療内容、行動調整、その他配慮した点などについて検討した。なおデータは匿名化された情報を用いて個人情報の保護に配慮した。

結果：2023年8月の1ヶ月間に来院した障害者は125名でその内ダウン症候群は24名であった。その中で施設への訪問診療を行った者が2名いた。その他の染色体異常としてクラインフェルター症候群が2名、9番目染色体異常、12番目染色体異常が各1名いた。ダウン症候群の最高齢は59歳であった。行動調整は全て通法で行われた。治療内容は定期健診、口腔衛生指導、フッ化物塗布などであった。過去に行った症例では、初診時多数歯齲蝕が認められたため2次医療機関で全身麻酔で全てを治療した例、行動変容法によって通法での治療が可能だったにも関わらず環境の変化で歯科治療への適応が出来なくなった例、多数歯欠損に対して義歯の作製を行ったが著しい拒否のため装着管理まではできなかった例等があった。

考察：通法での治療が出来なくなった症例や、義歯の使用に関しても適応できなかった例では、ダウン症候群の特性である「がんこな性格」や高齢に伴う退行現象も考慮する必要があるがあった。ダウン症候群は一般に齲蝕は少ない傾向にあるが、そのエビデンスはない。本症例でも初診時に多数歯齲蝕が認められた例もあり行動調整を考える上で高次医療機関との連携は重要と考えられた。またダウン症候群の高齢化やその家族の高齢化への対応は、医療だけではなく福祉としての対策も重要と考えられた。

Keyword：障害者歯科 染色体異常 医療連携

一般口演⑨

演 題	日常臨床における口腔機能発達不全症への対応 第2報 ～初診時の状況と対応～
所 属	医療法人杏友会さいとう歯科医院
発表者名	齋藤 秀子
共同研究者名	久保島 里実

小児口腔機能管理料の算定が少ないことの原因として、該当する患者がいないこと・診断基準が複雑・管理の方法がわからない・算定要件を満たさない・算定要件が複雑であるなどの意見が出ていることが報道された。う蝕の減少により歯科医院を受診する小児の減少が生じている昨今、一般診療室において「該当する患者がいないこと」が算定していない理由の1位になることもうなずける事実であろう。

小児歯科を標榜している当院においては、小児患者（18歳未満）の割合は来院患者の20%ほどである。この1年ほど、月に20名程度の患者様に小児口腔機能管理料を算定している。

令和6年度の歯科医学大会において口腔機能発達不全症改善症例より見えてくることとして、「○前歯交換期への対応○舌小帯異常○口呼吸への対応○お口ぽかんへの対応○習癖への対応が必要なこと」を提示した。

今回、口腔機能発達不全症を算定した患者の1, 初診時の状況 2, その後の対応について好発年齢・男女差等幾つかの調査を実施した。

日常臨床における口腔機能発達不全症への取り組みの一助になると幸いである。

Keyword：日常臨床 口腔機能発達不全症 お口ぽかん

ポスター討論①

演 題	舌疾患に対して西洋薬や漢方薬の味等が不快で使用できず治療に苦慮した2症例
所 属	たかはし歯科クリニック北本 ¹⁾ 、グリーンパークグループまつぎ歯科クリニック ²⁾ 、医療法人社団善仁会 北本みなみ歯科医院 ³⁾ 、医療法人社団文蔵会 ごう歯科クリニック ⁴⁾ 、ミドリ歯科医院 ⁵⁾ 、えのもと歯科クリニック ⁶⁾ 、一般社団法人埼玉県北足立歯科医師会 ⁷⁾
発表者名	高橋 進也 ^{1)、7)}
共同研究者名	松崎 哲 ^{2)、7)} 、宮沢健太郎 ^{3)、7)} 、柏木 剛 ^{4)、7)} 、齋藤和宏 ^{5)、7)} 、榎本富男 ^{6)、7)}

【緒言】舌のアフタや地図状舌などのヒリヒリ感や疼痛症状に対しては含嗽薬やステロイド薬が使用されることが多いが、含嗽薬の味が苦手な場合や軟膏が口腔内に残る不快症状で使用できないことがある。今回、西洋薬では不快症状が強かったため、漢方薬を用いて改善した舌疾患の2症例を経験したので報告する。

【症例1】11歳女児。約1週間前から地図状舌が出現し、ヒリヒリ感が強く食事がしにくいことを主訴に来院。以前、近歯科医院で処方された含嗽剤を使用していたが、今回は症状が改善しなかった。また、ステロイド軟膏を使用したが口腔内での不快感が強いとのことであった。最近、習い事で疲れがとれず下痢症状を認め、口腔内所見では舌尖部から舌背部に糸状乳頭の消失を認め、数日前まではアフタも出現していたとのことであった。以上から半夏瀉心湯を処方したが、苦くて服用できないと相談があり、気虚も認めたため補中益気湯に変更した。しかし、補中益気湯でも味が合わず服用困難とのことから六君子湯に変更した。六君子湯の味は問題ないとのことから継続服用を指示し症状改善を認めた。

【症例2】40歳女性。約5日前から舌に多発性のアフタが出現し擦過痛が強いため近内科を受診したところ、含嗽剤と黄連湯を処方されたが含嗽剤の味が合わず、黄連湯は苦いため服用できず症状改善を認めないことから来院。仕事疲れで元気が出ないとのこと、口腔内所見では舌尖から舌縁部に発赤を認め歯痕舌であった。気虚であることから補中益気湯、擦過痛に対しては立効散を処方したが、補中益気湯を服用すると浮腫を認めたため休薬し、立効散のみで対応し症状改善を認めた。

【考察】病態に対して適切な治療法があっても、薬の味等に不快感が強いことや副作用で使用できないことがある。本2症例から、薬の性質、副作用だけでなく味覚等も考慮し、患者とよく相談し対応することが重要であると示唆された。

Keyword：地図状舌 アフタ 漢方薬

ポスター討論②

演 題	知的能力障害者の静脈麻酔下歯科治療の導入に歯科衛生士が積極的に関与した一症例
所 属	埼玉県歯科医師会口腔保健センター
発表者名	久保 弘子
共同研究者名	清水千代子, 大島聡美, 飯田恵理, 富田早央里, 君塚沙紀, 青柳里沙, 矢作真依, 根本ちさと, 中野将志, 多田千晶, 塚脇香苗

【緒言】薬物を用いた行動調整法は、患者に心的外傷を負わせることなく確実な処置が行えるとして知的能力障害者の歯科治療に有効である。しかし、患者側にとっては身近な方法とは言い難くその実施に理解を得ることが難しい場合もある。薬物の使用に家族が大きな不安を抱えていたが、担当歯科衛生士が介入することで不安が軽減し適切な口腔管理へと繋げられた症例を経験したので報告する。本発表に際し保護者へ書面にて同意を得た。

【症例】患者は33歳、知的能力障害の男性。体動コントロール下に定期的な口腔管理を行っていた。環境が変わったことをきっかけに精神的に不安定になり、歯科受診時にも入室拒否、処置前後の興奮などが見られるようになった。

【経過】歯科医師から全身麻酔下治療を提案したが、母の不安が大きく受け入れられなかった。そこで笑気吸入鎮静法の併用を担当歯科衛生士から提案した。母から不安の言葉もあったが、衛生士が根気よく説明することで了承し、回数を重ねることで受け入れられた。しかし笑気吸入鎮静法では完全に体動を抑えることはできず処置時間にも限界があったため、静脈麻酔下の処置を勧めた。来院ごとに衛生士が母の不安や要望を傾聴し説明を続けた結果、母の了承のもと静脈麻酔は問題なく施行され、適切に処置を行えた。

【考察】患者の母には薬物を用いた行動調整に漠然とした不安があった。一方で定期的な口腔清掃への要望は強かった。すぐに薬物を用いた行動調整に移行するのではなく、母の不安や要望に寄り添いつつ時間をかけて説明しできる処置を継続したことで、静脈麻酔の施行についても理解が得られたものとする。

【結語】患者や家族にとってより身近な担当衛生士が介入したことで不安を軽減させ、効果的な処置に繋げることができた。

Keyword : 障害者歯科, 静脈麻酔, 笑気吸入鎮静法, 歯科衛生士

ポスター討論③

演 題	日帰り全身麻酔患者の保護者に対して心理的サポートを行った1症例～歯科衛生士、公認心理師としての新たな試み～
所 属	埼玉県歯科医師会口腔保健センター
発表者名	清水 千代子
共同研究者名	塚脇香苗, 久保弘子, 大島聡美, 富田早央里, 飯田恵理, 君塚沙紀, 青柳里沙, 矢作真依, 根本ちさと, 中野将志, 多田千晶

【緒言】障害児者の歯科治療において全身麻酔（以下 GA）は行動調整法の一つであるが、保護者にとっては非日常のことであり不安の訴えを聞くことも多い。今回、歯科衛生士が公認心理師を取得した事を契機に、GA 患者の保護者へ新たな心理的サポートを試みた1症例を報告する。なお発表に際し書面にて保護者の同意を得た。

【症例】両側智歯抜歯に対し2回のGAを施行した患者（17歳、女性、自閉スペクトラム症、知的能力障害）の父母へGA当日に心理面接を行った。面接は個室にて、公認心理師の資格を有した歯科衛生士が対面で行った。面接の趣旨を説明し承諾を得た後、半構造化面接を行った。面接前後にSUDs (Subjective Units of Disturbance Scale: 主観的障害単位スケール—最も強い不安を10とし全く不安がない状態を0で表すスケール) を保護者が記入し、その数値を不安尺度とした。

【経過】面接時間は45分であった。1回目では母親は顔色が悪く落ち着きがなく、父親は前のめりの姿勢となり質問が多かった。不安内容を聞き取り、傾聴と受容及び共感的理解、要約、説明、心理教育を行った。面接が進む過程で表情や態度が落ち着き、SUDsは8→0に低下した。2回目は初回から1年後であった。待機中の不安の軽減、セルフケアを目的としたリラクゼーション法を行ったところSUDsは2→0となった。いずれもGA治療担当医、歯科衛生士、および歯科麻酔科医へ面接結果の概要を報告し、チーム医療としての連携を図った。

【考察及び結論】面接によってSUDs値は低下し、保護者の不安は軽減した。面接者が歯科衛生士と公認心理師のそれぞれの専門知識を有したことによって、歯科処置に関するものだけでなく、全般的な不安への心理的介入が行えたことで不安が軽減したものと考えられた。

Keyword : 歯科衛生士, 公認心理師, 日帰り全身麻酔, 心理的サポート

ポスター討論④

演 題	口腔保健センターにおける治療待機患者への取り組み ～全身麻酔・静脈麻酔の現状と動向，今後の課題～
所 属	埼玉県歯科医師会口腔保健センター
発表者名	飯田 恵理
共同研究者名	清水千代子，久保弘子，大島聡美，富田早央里，君塚沙紀， 青柳里沙，矢作真依，根本ちさと，中野将志，多田千晶， 塚脇香苗

【緒言】埼玉県歯科医師会口腔保健センター（以下センター）では，行動調整のひとつとして全身麻酔法（以下 GA）と静脈内鎮静法（以下 IV-S）下での歯科治療を実施している．現在，待機期間が長いことが課題となっており，麻酔治療のキャンセル枠への対応は迅速に行う必要がある．一方で，患者は障害特性や生活環境が大きく異なるため配慮が不可欠であり，予約の調整を困難にしている．今回，センターの麻酔予約の状況と，待機患者への取り組みについて検討したので報告する．

【対象および方法】2024年10月から2025年9月の1年間にセンターで行われた GA，IV-S 治療患者を対象に，予約件数やキャンセル件数の変動，キャンセル枠のリカバー率を期間ごとに調査して集計した．データは匿名化された情報を用いた．また，麻酔治療キャンセル枠をリカバーするにあたり，事前に患者側へ情報収集し，キャンセル待ちリストを作成した．

【結果】麻酔治療件数は GA が 220 件，IV-S が 234 件，平均待機期間は GA が約 8 ヶ月，IV-S が約 5 ヶ月であった．麻酔治療キャンセル件数は合計で 70 件であった．キャンセルのリカバー率は 2 日前までで 100%，前日で 90%，当日キャンセルについては，麻酔治療ではなく通法でのリカバーとなった．キャンセル発生の際には作成したリストに基づき迅速に対応した．

【考察および結語】障害者歯科において，安全な治療を行うために麻酔治療は重要な選択肢であるが，専門性の高い医療従事者や設備が必要不可欠であり，待機期間の長さが課題である．今回，麻酔治療枠の調整にあたり，患者側へ連絡先の確認を徹底し，来院しやすい条件の情報を事前に得ておくことで，急なキャンセルが発生した際にも予約枠を有効活用することができたと考えられる．

Keyword：口腔保健センター，全身麻酔，静脈麻酔，治療待機患者

ポスター討論⑤

演 題	医療介護総合確保基金事業における埼玉県での取り組み Initiatives in Saitama Prefecture under the Medical and Long-Term Care Comprehensive Securing Fund Project
所 属	埼玉県歯科医師会地域保健部
発表者名	大澤 健祐
共同研究者名	出浦 恵子・遠藤 徹・田中 入・浜野 洋一・望月 司・ 小宮山 和正

【目的】我が国の施策として、平成26年度から社会保障を高齢者医療へ重点的に補完することを目的とした、地域医療介護総合確保基金が開始された。埼玉県ではこの基金を活用し在宅での口腔管理を積極的に行なうために各地域に拠点を開設。今回その経時的な事業展開を報告する。

【方法】埼玉県内に歯科衛生士を常勤とする拠点を20か所設置して、歯科通院困難な方を対象とした相談窓口を設ける事業を開始した。

【結果】在宅における通院治療困難者は多く、かつ多様である。当初高齢者のみを対象としていたが、対象を障害児者にも広げ、多くの方々からの相談を受け付けた。相談内容としては、治療や予防について、治療費用、往診対応可能な診療所の紹介などがあげられる。また、入院することで歯科との繋がりがなくなり口腔の状況が悪化することを防ぎ、入院期間を短縮するために多数の病院での口腔アセスメントを実施した。さらに地域で様々な医療介護福祉の連携を深め、それらを通じての歯科衛生士の復職支援、業務範囲の拡大にもつなげた。

【考察】開始から12年が経過し、当初のフォーマットでは対応できなくなったため、対象者に障害児者などを追加し、県内の拠点を各郡市会に合わせて増加させ、利用者の利便性を図るなどを行った結果、地域拠点は30か所まで増え、件数も増加傾向を示し順調な経過であったが、2025年を迎え見直しの時期を迎えた。事業開始時と比較して他分野との連携状況は格段に進んでおり、歯科の重要性も広く認識されてきていると考えられる。今後は、県中央の1か所で相談窓口を引き継ぎ、2040年問題へ向けて新たな事業を構築し発展させていきたい。

Keyword : 医療介護総合確保基金 歯科通院治療困難者相談 病院口腔アセスメント

ポスター討論⑥

演 題	「岩槻高齢者講習センターにおける歯と口の健康調査」報告
所 属	埼玉県歯科衛生士会 ⁽¹⁾ 、埼玉県歯科医師会 ⁽²⁾
発表者名	須賀 道子 ⁽¹⁾ 、佐藤 恵美 ⁽¹⁾
共同研究者名	大久保喜恵子 ⁽¹⁾ 、木邨ひとみ ⁽¹⁾ 、清水けふ子 ⁽¹⁾ 、十川裕子 ⁽¹⁾ 、高橋志津子 ⁽¹⁾ 、田代ひろみ ⁽¹⁾ 、福田尚子 ⁽¹⁾ 、村上芳江 ⁽¹⁾ 、出浦恵子 ⁽²⁾ 、小宮山和正 ⁽²⁾ 、吉岡典子 ⁽¹⁾ 、桑原 栄 ⁽²⁾

目的：さいたま市岩槻区に、埼玉県警察岩槻高齢者講習センターが2024年5月に開設され1年が経過した。同施設内に埼玉県歯科医師会が「お口の元気アップステーション」を設置した。そこへ認知機能検査終了後の受講者に立ち寄って頂き、気軽に健康チェックをしながら口腔機能維持の重要性やフレイル予防への行動変容を促している。今回、3か月間の気づき調査を実施したので報告する。

方法：2025年の9月3日から2025年12月2日迄に、お口の元気アップステーションに来所した一般高齢者1,610名を対象に実施した。今回、調査には埼玉県歯科医師会が作成した健口長寿「転ばぬ先の歯と口の健康」パンフレット中の6項目のチェックリストを使用した。また、簡易筋力測定として握力測定も実施した。

結果：男性678名(52.2%)、女性621名(47.8%)の合計1,299名で、内訳は年齢65～69歳は20名(1.5%)、70～74歳は285名(22%)、75～79歳は570名(43.9%)、80歳以上424名(32.6%)であった。回答率は80.6%。チェックリストは6項目で、①左右の奥歯でしっかりと噛めない。283名(21.8%) ②歯が抜けたり、根だけになっているところがある。384名(29.6%) (但し、義歯を使用して噛めている場合は良しとした。) ③噛むと痛んだり、不快感がある。156名(12%) ④むせやすい。298名(22.6%) ⑤口が渇きやすかったり、しゃべりづらい時がある。368名(28.4%) ⑥最近、体重が減ってきている。164名(12.6%)であった。年代別にみてもむせや口の渇きを訴える者が多かった。握力測定ではフレイル評価の男性28kg未満が264名(39.3%)、女性18kg未満が195名(32.5%)で、後期高齢者になると握力の低下の者が多い事もあらためて確認できた。

考察：人生100年時代と言われ、8020達成者ほ令和4年で51.6%であるが、運動機能と直結すると言われている咬合力については、握力の低下とともに、オーラルフレイルの疑いの高齢者が多くみられた。

今後更に超高齢化社会を迎え、2040問題を鑑みると、歯科受診勧奨を含む口腔管理への行動変容をあらゆる場面で発信していく必要がある。今後、「お口の元気アップステーション」は、心身共に健康管理を主体にして、高齢者の運転免許更新の一助となるよう努めていきたいと考えている。

Keyword：高齢者、口腔健康管理、握力、フレイル

ポスター討論⑦

演 題	(一社)浦和歯科医師会と埼玉県立がんセンター共催の口腔がん検診で、要精密検査となった3例について
所 属	埼玉県立がんセンター
発表者名	桂野 美貴
共同研究者名	八木原一博 ¹⁾ 、石井純一 ¹⁾ 、炭野淳 ¹⁾ 、君島 裕 ²⁾ 、矢尾喜三郎 ²⁾ 、塩野英昭 ²⁾ 、清水裕之 ²⁾ 1) 地方独立行政法人埼玉県立病院機構 埼玉県立がんセンター 2) 一般社団法人 浦和歯科医師会

2023年11月より浦和歯科医師会と埼玉県立がんセンター口腔外科は共催による口腔がん集団検診を開始し、口腔がんの早期発見に努めている。対象者は50歳以上のさいたま市在住の市民であり、これまで3回開催した検診の中で計140人以上の検診者があった。このうち、要精密となり当院に紹介された3例について報告する。

症例1：50歳代、女性。主訴：喉の腫れ。臼後部に1cm程度の粘膜下腫瘍を認め、表面粘膜に異常は見られなかったが、要精密検査と評価した。当科初診後、画像検査を進め、粘膜下腫瘍性病変の診断を得、全身麻酔下に腫瘍切除を行った。病理組織診断の結果は唾液腺癌であった。以降、定期経過観察中である。

症例2：60歳代、男性。主訴：口底の白色病変。口底前方に表在性白色病変を認めた。食道癌の既往があり、口腔がんのハイリスク群であるため、要精密検査となった。細胞診で「Class III、擬陽性、軽度から中等度の異形細胞」の診断であったため、しばらく経過観察を行ったが、徐々に白色が強くなったことから全身麻酔下、診断を兼ね切除生検を施行した。病理組織診断は上皮高度異形成であった。再発や多発癌のリスクがあり、定期経過観察を行っている。

症例3：70歳代、女性。主訴：頬粘膜の白斑。両側頬粘膜にレース様の表在性の白斑がみられた。また、歯頸部歯肉にも表在性の白斑を複数箇所認めた。本人の不安が強かったため要精密検査とした。細胞診を施行しClass IIIで明らかな悪性所見は認められず、3か月に1回程度の経過観察を継続している。

口腔がん検診を希望する市民はもともと口腔内に関心があり、自身の口腔内状態に懸念を抱えているケースが少なくない。その中で、本事業により口腔癌の早期病変が発見できたことは意義が大きいと考えた。

Keyword：口腔がん検診

ポスター討論⑧

演 題	e スポーツにおける健康障害～EVO Japan におけるアンケート調査の結果から～
所 属	葭田歯科医院
発表者名	葭田 敏之
共同研究者名	竹内 誠人, 山崎 義宗, 白澤 祐二

e スポーツプレイヤーが持つ心身の不調については未だ明らかになっていないことが多い。今回我々は日本最大の格闘ゲーム大会である EVO Japan において、プレー中やプレーに起因する障害についてのアンケートを行い、e スポーツによる心身の不調を調査した。

質問内容は性別・年齢・参加タイトル・e スポーツ歴・プレー時間・睡眠時間・プレー中の体調不良・健康上の不安とした。プレー上の体調不良については頭痛・目の疲れ・肩こり・背中や腰の痛み・手や手首の痛み・足の疲れ・動機・覇や顎の痛み・不眠・憂鬱感についてはチェック式、その他については自由記載とした。健康上の不安については自由記載とした。記入は各タイトル Top 8 (一部の団体戦は Top16) の選手については主催スタッフから依頼して任意に記載してもらい (上級者)、それ以外については入口や救護室等に設置し、来場者に任意で記入してもらった (一般)。

3 日間を通じて一般 60 名、上級者 162 名の回答を得ることができた。不調は最も多いのが目の疲れ、次いで肩こり、頭痛、背中・腰痛であった。不眠・憂鬱感など精神的な不調を訴えるものも見られた。チェック式の不調の一人当たりの個数は一般 2.53 ± 1.88 個、上級者 2.15 ± 2.20 個であった。以下上級者について統計学的検討を行った。プレー時間と不調の個数の間には弱い正の相関が見られた。プレー時間と各種不調においては、手首の痛み・肩こり・不眠・憂鬱感がある人はプレー時間が長い傾向が見られた。また憂鬱感を感じている人は年代が低い傾向が見られた。

プレー時間が長くなるほど手首の痛み・肩こり・不眠・憂鬱感が増える傾向がみられており、長時間のプレーが体の不調を引き起こすことが示唆された。憂鬱感と年齢の関係については、e スポーツを続ける過程でコミュニティに所属することが憂鬱感を下げる効果があると考えられた。

Keyword : e スポーツ、コンディショニング、アンケート

ポスター討論⑨

演 題	中学生の歯・口の健康づくりと自尊感情・生活習慣との関連
所 属	1) 明海大学歯学部口腔保健予防歯科学 2) 日本歯科医師会
発表者名	深井 智子 ¹⁾
共同研究者名	野村啓介 ²⁾ 、永井明子 ¹⁾ 、佐野智也 ¹⁾ 、岩崎美友 ¹⁾ 、 竹下 玲 ¹⁾

【目的】

近年、教育現場において心の健康教育を効果的に実施することが重要な課題となっている。自尊感情の低さは、セルフ・コントロールの欠如、依存症、摂食障害、精神障害、自殺などとの関連が指摘されており、その育成教育は喫緊の課題である。自尊感情の評価指標としては、Rosenberg 自尊心尺度日本版(以下、RSES-J) が広く用いられている。中学生期は、他律的健康観から自律的健康観へ移行する重要な発達段階であり、将来的な健康格差縮小に寄与し得る最終段階でもある。歯科保健活動は、基本的生活習慣や規範意識の形成に寄与することが報告されていることから、歯科保健活動を通じた健康教育が、生徒の自尊感情に与える影響について検討することを目的とした。

【方法】

地方都市の公立中学校生徒を対象に、RSES-J、学校歯科健康診断結果、ならびに生活習慣の自覚を目的として作成された「健康・健口チェックリスト(以下、チェックリスト)」を用いて分析した。RSES-Jは高得点ほど自尊感情が高く、チェックリストは低得点ほど良好な生活習慣を示す尺度である。う蝕は DMF 指数を用い、DMF=0、F \geq 1、D \geq 1 の3群で比較した。C0は保有の有無で検討した。本研究は教育委員会の承認を得て、連結可能匿名化により実施した。

【結果】

分析対象は496名であった。RSES-Jは四分位により群分けを行った。自尊感情が高い群では、DMF=0およびC0保有なしの割合が有意に高かった(p<0.05)。また、チェックリスト得点においても有意差が認められ、自尊感情の高い群ほど良好な生活習慣を有していた(p<0.05)。

【考察・結論】

歯科保健活動を通じた健康教育は、う蝕抑制と齲蝕リスクの低下を介して、生徒の自己管理能力を高め、その結果として自尊感情の向上と良好な生活習慣の確立に寄与する可能性が示唆された。

Keyword：学校歯科保健、保健管理・保健教育、う蝕予防(DMF・C0)、生活習慣

ポスター討論⑩

演 題	CAMBRA™(リスク評価に基づくう蝕予防)の臨床教育での有用性
所 属	明海大学歯学部社会健康科学講座口腔保健予防歯科学
発表者名	永井 明子
共同研究者名	深井智子、岩崎美友、佐野智也、竹下 玲

【目的】

Caries Management By Risk Assessment (CAMBRA) の日本語は、「リスク評価に基づくう蝕管理方法」である。このプログラムは、う蝕の侵襲因子（疾病指標とリスク因子）と防御因子を精査し、その結果から、千差万別な個人のう蝕リスクを、4つのクラス（Extreme, High, Middle, Low）に分類し、そのクラス別に予防方法を提供する。この方法は、シンプルで使いやすい上に、高いEBMを有している。本研究は、CAMBRAの講義と実習を用いて、う蝕リスクを教育し、その有用性を検討した。

【方法】

明海大学歯学部5年生に、う蝕リスクの講義後、CAMBRAの実習を実施し、無記名のアンケート調査を行った。アンケートは、①CAMBRAの認知、②う蝕リスクの個人差に関する認識、③講義・実習による理解の深化、④疾患因子・リスク因子・防御因子の総和としての評価（バランス評価）の理解、⑤う蝕リスクレベル別推奨内容の理解、並びに⑥CAMBRA普及の必要性についておこなった。再度アンケートを8か月後に実施し、記憶の定着と知識状況を確認した。また、結果を集計し検討を加えた。本研究は明海大学歯学部倫理委員会の承認を得ている（承認番号A2505）。

【結果と考察】

アンケートについて項目①および②について「はい」と回答した者は89.1%であった。項目③、④、⑤において「理解が深まった」と回答した者は95.7%であり、CAMBRA実習を通して、う蝕リスク評価の考え方に対する理解が促進されたと考えられた。また、項目⑥では97.8%が普及の必要性を「とてもそう思う」と回答した。これらの結果は、歯学部学生に対する臨床的思考教育において、CAMBRAが有用であることを強く示していると考えられる。

【結論】

CAMBRAは、う蝕予防に関する教育に有用なツールであることが示唆された。

Keyword : CAMBRA、う蝕リスク評価、歯科教育

ポスター討論⑪

演 題	回復期・慢性期病棟での外部実習が学生の学修意識に及ぼす影響～歯学部2年生アンケート調査～
所 属	1) 明海大学歯学部 口腔保健予防歯科学分野 2) 明海大学歯学部 高齢者歯科学分野 3) 医療法人啓仁会 平成の森・川島病院 4) 明海大学歯学部 摂食嚥下リハビリテーション学分野
発表者名	岩崎 美友 ¹⁾
共同研究者名	佐野智也 ¹⁾ 、田村暢章 ²⁾ 、松村内久 ³⁾ 、片山幸太郎 ¹⁾ 、深井智子 ¹⁾ 、永井明子 ¹⁾ 、西條光雅 ¹⁾ 、松田玲於奈 ²⁾ 、大西孝宣 ²⁾ 、大岡貴史 ⁴⁾ 、竹島 浩 ²⁾ 、竹下 玲 ¹⁾

【目的】高齢化が進行したわが国においては、回復期・慢性期療養の病棟や介護施設等、長期療養の場での、多職種連携による口腔ケアは摂食嚥下機能の維持・改善を通じた栄養状態の保持や、誤嚥性肺炎の予防等に関与することから重要性が認知されている。したがって、歯学部学生が長期療養施設で実習を行うことは、包括的ケアの一環としての口腔ケアの意義を学ぶ機会として有用と考えられる。そこで演者らは、本学歯学部2年生を対象に外部施設実習後アンケート調査を実施し、教育的効果（学修意識への影響）を検討した。

【方法】2025年度「福祉と介護」での外部施設（平成の森・川島病院）実習に参加した明海大学歯学部2年生を対象に、実習後匿名アンケート調査を実施した。5段階評価により、事前オリエンテーションの理解、受入先スタッフの対応、患者・家族への配慮、身だしなみ・態度の自己評価、病院と介護施設の機能理解、多職種連携、安全管理意識、講義内容との関連づけ、今後の学修への有用性、実習全体の満足度を集計した。自由記載はテキストマイニング法で解析した。

【結果・考察】98名の回答が得られ、総合満足度は高く、事前オリエンテーションの理解、患者・家族への配慮、受入先スタッフの対応、学修の有用性に関する項目は概ね高評価であった。一方、病院と介護施設の違い、多職種連携、講義との関連づけは評価が分かれた。自由記載の解析では、「良い」「学ぶ」「理解」「経験」「貴重」「今後」等の肯定的語が中心で、実習が前向きに受け止められていることが示唆された。さらに「口腔」「ケア」「患者」「歯科」の結びつきがみられ、長期療養の場における歯科・口腔ケアの役割理解に資した可能性がある。

【結論】回復期・慢性期病棟等の外部施設実習は、本学歯学部2年生の学修意識を高める教育機会となることが示唆された。

Keyword：回復期・慢性期病棟、口腔ケア、早期臨床体（見学実習）

ランチオンセミナー

医療ホワイトニング×時短 ティオンがもたらす新しい選択肢

明海大学保健医療学部教授 金子 潤



近年、歯のホワイトニングは患者ニーズの高まりとともに主要な審美歯科治療のひとつとして位置づけられるようになりました。とくに、歯科医療機関で歯科医師の検査・診断の結果に基づいて、歯科医師あるいは歯科衛生士が国によって製造・販売が認められているホワイトニング材を用いて行うホワイトニングを「医療ホワイトニング」と呼び、脱毛サロンやエステサロンなど医療機関以外が提供するセルフホワイトニングのようなサービスと明確に区別しています。医療ホワイトニングでは、診断と治療方針の決定、ホワイトニング法や薬剤の選択、施術中の管理、術前から術後に至るまでの専門的色彩記録、術後のメンテナンスとタッチアップに至るまで、すべてを歯科医師・歯科衛生士が行うことが必須条件です。

本ランチオンセミナーでは、「医療ホワイトニング×時短」をテーマに、ジーシーのティオンシリーズを切り口として、医療ホワイトニングの基礎知識や臨床ポイントについて解説します。医療現場における時間的制約や患者満足度の向上といった課題を踏まえながら、歯科医療機関が提供する医療ホワイトニングの価値を再整理し、今後の可能性について展望したいと思います。

研修コード 3102 2111

【略歴】

- 1991年 北海道大学歯学部 卒業
- 1995年 北海道大学大学院歯学研究科 修了 博士(歯学)
- 〃 北海道大学歯学部附属病院 医員(第一保存科)
- 1997年 北海道大学歯学部 助手(歯科保存学第一講座)
- 2000年 明倫短期大学 助教授(歯科衛生士学科)
- 2005年 明倫短期大学 教授(歯科衛生士学科)
- 2007年 明倫短期大学附属歯科診療所 所長(兼務)
- 2013年 千葉県立保健医療大学健康科学部 准教授(歯科衛生学科)
- 2021年 明海大学保健医療学部 教授(口腔保健学科)
- 2024年 明海大学保健医療学部 学部長

【学会活動】

- 日本歯科保存学会 上級医
- 日本歯科審美学会 常任理事・認定医・ホワイトニングコーディネーター委員長
- 日本歯科色彩学会 常任理事・認定医
- 美容口腔管理学会 会長・指導医(Diplomate)

特別講演 I

IOS 時代の補綴診療 —精度検証と臨床応用—

昭和医科大学 歯学部 歯科補綴学講座
歯科補綴学部門准教授 高場 雅之



口腔内スキャナ（Intraoral Scanner : IOS）と CAD/CAM の普及により、補綴診療のデジタル化は急速に進展している。近年販売されている IOS は、飛躍的に性能が向上し、比較的安価な機種も登場しつつある。IOS は印象採得時の患者負担軽減や診療効率の向上に寄与する一方、取得されるデジタルデータの精度や咬合再現性、臨床応用上の限界については、十分な理解が不可欠である。また、CAD/CAM を用いた歯冠補綴装置はジルコニアが中心的な役割を担い、日常臨床において広く普及し始めており、材料学的特性に対する理解も重要である。

本特別講演では、国内で販売されている IOS の特徴について概説し、IOS 導入による補綴診療ワークフローの変化や、精度に関する基礎的検証結果を紹介する。さらに、従来の印象法との比較を通じて IOS の特性を整理するとともに、有歯顎補綴やインプラント補綴など日常臨床で遭遇する多様な症例を提示し、その適応範囲と注意点を具体的に示す。特に、全顎スキャンにおける誤差要因、咬合採得の再現性、補綴装置の適合性に焦点を当て、デジタルワークフローを安全かつ有効に活用するための実践的ポイントを提示する。加えて、CAD/CAM を用いた歯冠補綴装置の現状と課題にも言及し、IOS 時代における現実的かつ持続可能な補綴診療の在り方について、臨床家の視点から考察したい。

研修コード 2610 2801

【略歴】

平成 11 年 3 月 昭和大学 歯学部 卒業
平成 15 年 3 月 昭和大学 大学院 歯学研究科 修了
平成 16 年 3 月 昭和大学 歯学部 歯科補綴学講座 助教
平成 25 年 5 月 Eberhard Karls Universität Tübingen(Germany) 留学
平成 27 年 1 月 昭和大学 歯学部 歯科補綴学講座 講師
令和 6 年 4 月 昭和大学 歯学部 歯科補綴学講座 歯科補綴学部門 准教授
<学会>
日本補綴歯科学会 専門医, 指導医, 代議員
日本口腔インプラント学会 専門医
日本デジタル歯科学会 代議員

特別講演Ⅱ

私の歯周ポケット治療法の変遷と現状

東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 歯周病学分野
歯周光線治療学担当教授 青木 章



1991年より歯周治療を専門的に開始し約35年が経過した。当初は、基本治療中の歯周ポケット治療においては、従来の根面のスクレーリング・ルートプレーニング (SRP) のみで忠実に対応し、1990年代の後半まで実施していた。その後、1990年代後半から2000年代中頃までは、SRPに加え、テトラサイクリン系抗菌薬の局所投与 (LDDS) を併用し、より確実なポケットの治癒を得ていた (現在は限られたケースにのみ使用)。その後、2000年頃からEr:YAGレーザーの併用を模索し始めた。2000年代中頃から、中等度から重度のポケットにおける治療コンセプトが大きく変わり、一部がFlapless pocket surgeryへ移行した。それに伴い、2005年頃にSRPにEr:YAGレーザーを併用したFlapless pocket surgeryであるEr:YAG Laser-assisted comprehensive periodontal pocket treatment (Er-LCPT)を開発し (*Clin Oral Invest* 2022, *J Periodontol* 2023), 今日では基本治療中においてFlaplessでの再生治療を行なっている。また、一方で、2010年から、重度歯周炎においては症例により、初診から2回目か3回目の治療段階で、超音波スクレーリングと抗菌薬 (アジスロマイシン) を併用したOne-stage full-mouth disinfectionによる全顎1回治療を実施するようになった。この方法では、複雑な病態の状況においても早期に非常に良好な歯周組織の治癒が得られ、患者術者ともに楽な治療が行えるようになっている。現在は、治療段階とポケットの状況に応じ、上記の4種類の処置法を使い分け、シンプルで迅速で確実、かつ低侵襲な歯周治療を行っている。

研修コード 2504 3105

【略歴】

1989年 東京医科歯科大学歯学部卒業

1989年 東京医科歯科大学歯学部歯科保存学第二講座 研修医・医員

1996年 同・リサーチ・アソシエイト (日本学術振興会研究員)

1998年 同・助手

2003-04年 文部科学省在外研究員

(米国カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) Visiting Assistant Professor)

2011年 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 歯周病学分野 講師

2017年 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 歯周病学分野 准教授

2019年 東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 歯周病学分野 歯周光線治療学
担当 教授

2022年 明海大学客員教授

2023-24年 東京医科歯科大学副理事（入試担当）

2024年 東京科学大学 大学院医歯学総合研究科 歯周病学分野 歯周光線治療学担当
教授

2024年 東京科学大学アドミッションセンター副センター長

<所属学会>

日本歯周病学会評議員（歯周病専門医・指導医）、日本歯科保存学会評議員（保存治療上級医）、日本レーザー歯学会理事（専門医・指導医）、日本レーザー医学会評議員、口腔病学会理事、Academy of Laser Dentistry（米国ALD, 認定医）；WFLD（国際レーザー歯学会）理事長

特別講演Ⅲ

歯周病病因論の再考 —歯周病原菌の観点から—

明海大学歯学部口腔生物再生医工学講座
微生物学分野主任教授 猪俣 恵



口腔内には多様な細菌が共生する口腔微生物叢が存在し、健康な状態では宿主と調和を保ちながら恒常性が維持されています。従来、歯周病は *Porphyromonas gingivalis*、*Tannerella forsythia*、*Treponema denticola* からなる、いわゆるレッドコンプレックスが主因であると考えられてきました。しかし近年では、歯周病は特定の細菌による感染症ではなく、複数の細菌が協調的に作用し（polymicrobial synergy）、微生物叢全体のバランスが崩れる（dysbiosis）ことで発症・進行する疾患であることが明らかになってきています。

加齢やストレスなどの局所環境の変化により病原性を有する細菌群が優勢となり、組織破壊によって生じる栄養源がさらに細菌の増殖を促進することで、細菌叢の変化と炎症が相互に増悪し合う悪循環が形成されます。このような病的微生物叢への移行および悪循環の形成・維持において、*Porphyromonas gingivalis* はキーストーン病原体として機能すると考えられています。

本講演では、レッドコンプレックスを中心とした従来の病因論から、polymicrobial synergy and dysbiosis (PSD) モデルに基づく微生物叢全体の機能異常へと視点が拡張された近年の歯周病病因論について概説します。

研修コード 2203 3404

【略歴】

- 1999年 愛知県立半田高等学校卒業
- 1999年 愛知学院大学歯学部入学
- 2005年 同大学卒業
- 2005年 愛知学院大学大学院歯学研究科 歯周病学専攻 博士課程入学
- 2009年 愛知学院大学大学院歯学研究科 歯周病学専攻 博士課程修了
- 2009年 朝日大学歯学部 口腔微生物学分野 助教・愛知学院大学 非常勤講師
- 2016年 朝日大学 講師
- 2016-2017年 米国タフツ大学医学部 Visiting Scholar
- 2019年 朝日大学 准教授・愛知学院大学 非常勤講師（准教授級）
- 2021年 明海大学 准教授
- 2023年 明海大学歯学部 口腔生物再生医工学講座 微生物学分野 主任教授・愛知学院大学 非常勤講師（教授級）